



閑聖漫錄

全

口仁13
925



門
號 925
興

正志會澤先生著

閑聖漫錄

江戸書肆 青藜閣

水戸書肆 東壁樓

發



先君武公嘗曰儒者不好武古今皆然儒而好武如會澤恒藏豈易得哉蓋此時先生少壯尤好武事云今先生論著行於天下天下服其學識而至其生平

閑聖漫錄

序

好武則未必知也頃書賈
刻閑聖漫錄請余題言余
乃錄前言以授之令讀者
知先生有文有武論著決
非空言矣元治甲子春日

青山延光撰

閑聖漫錄目錄

父子血脈

陰陽五行

高山氣冷

縮齋社

長壽嶺方神社

功烈神祠

天益人生者必滅相友

性善

天命

閑聖漫錄

目錄

交舞得諫

孔子弟子

思不出位

聖賢務實行

孔子討陳恒

周易象象不可執一論

君子淑女

王操友

神聖同歸

閑聖漫錄

父子血脉

會澤安述

天祖天不在

皇孫天子讓且終

之神靈を授け寶祚に降るまじき事天地と窮る

の故一と爲るまじき事天子の命に違て今ある

皇統を承たる者人乃知る所まじき事寶

鏡を指たりて吾見是を視んともを視るの如くな

る一と爲るまじき事父子の親博く今も寶鏡不

映し給ふ故にまじき事天祖の遺體不

此の統才不在はたれか今日親とて天祖と瞻仰

一 始より異なり是は依て父子の親懐アハきこも萬世も
 於一日のや凡人の父祖と子孫とは同體一氣なりて子
 百世とすとも血脉傳承ケツミヤクヂンシヨウして続ツユるくたう一理コトワリと論せん
 亦先天地生物の本と言へ一夫と天地乾坤より陰
 陽の二氣ありて天ハ陽と志て形なり地ハ陰とれハ形何生
 とて天受と受て凝結キョウケツせられ地の形とたれとありて
 毛髮モウヘツ中ナカ運行ランギン一活物カツブツなり故生氣シキ充滿シユウマンして萬物と散ハク
 生以萬物皆天地の生らる所なり一氣なりて二氣と具へ
 生氣と金キンと土ツと木ボクと水スイあり人の四肢五官ハ地氣と受て形
 とたれ一氣と呼吸キフクして四肢五官ハ充滿シユウマンして二氣相合ふ

時ハ陽とて得て四肢温ユクなりて生活シヤク呼吸盡キフクて天氣テンキ推
 於時ハ死シく冷ヒヤカなり魂氣タマキ散サンして天テン歸キり於魄ハクハ地チ
 魄ハク聖セイとある又一平ヘイ金キン土ツ木ボク水スイの動極ドウキョクの物も二氣と合
 て生ナマせ一物たれハ一物の含イラむ和ワ於陽氣ヤウキハ體中テイチュウの氣血
 をまゐり回マヅる乃温ユクなりて氣血流行キケツリウコウする力とて四肢内乃
 全體カニ消化シヤウして物の陰インを金キン土ツ木ボク水スイの形と成シユせる廉レン息シツと
 以キ筋骨キンコツ肌肉キクニク筋キン筋コツを全體カニ物モノれ氣キ血ケツとまゐりて一
 二氣の動功カウキハ非ヒなり一乃地チの氣ハ動物ドウブツれ生活シヤクする
 一乃一氣イチキハ生ナマるる一各ナニ一厚薄オホホハあれとも大率オホヒラ人ヒトハ
 一乃一氣イチキハ生ナマるる一乃地チの氣ハ受ウて生活シヤクする一是コト異

たるをわたりて水と氣の程法を存するの如くして陰中
 此陽の中を地中を流るるも亦と氣の血脈を引下
 四肢を運行して行るる如く天界地中より入りて氣を
 志くとも木を滋生して根柢より枝葉を連ねる水氣を
 即ち地中の氣を結外するは亦氣を流通して
 血脈乃ちわたりて陰陽を合して生活し水氣の陰
 陽を結して根柢を為物に死活皆は道徳なりと氣
 物皆一死一活ありても其生るる氣の始りたる傳承
 志く後來迄永くあることなり植るも一旦生るる氣
 て枯るるも之と枝葉を結ひたる實は地中より入りて又

吾人の新樹根の形状を考へ別たして之を地中
 入りて氣の樹の枝をまわして根柢の氣をよき
 せしむるは樹の枝をまわして氣をよきと氣を
 之の如く一氣永く連綿して人の子孫を父祖の氣を
 傳承するも亦又是れ同一世代をわたりて氣を
 とも血脈を連綿して一氣流通する事なり父祖と子孫と
 一氣を異ならしむる父祖と子孫と一氣を異ならしむる
 是西洋の倫理此國の如く父祖と子
 孫と眼前より世あることを知りて一後世
 況を設くるる世此外の過去未來の別を異あらずして現

在り合せて之をわたりと誰も入り人もなくありふり
 たり。その中の梅岡乃やくは申ふを説くのかく矣
 形実十年の誘授もまたいふ或意想といふ梅岡の督
 者の目睫の物より思ひ國中と撰家なるのみくは風を
 病むもの已らんとす。あくのものとして恐怖はるの
 や。いふに報せれは先病死と患ふはれ切なるよして
 終るふ苦思して絶す是と解説せんといふ求むる及
 小はしきの若とら梅宛志る子後をよふとある。一と
 考へて。及世阿なり。一系子もあらんとす。あきく二世
 此説と梅岡の疾の病は、恐怖のよる憂鬱にて實

形も多物と目する。よすかゝるの系子は。名の記と蚕
 の蜂は化さるるやき敷のてふ。不堅きともう蝶乃ゆきた
 子卵の本の蚕よせられ。糸物の始なり。志く。終結して
 永世まで他物よ受せし。即ち人形先祖より一葉お取
 る。ふ異たし。ひ子孫は後より。て父祖は。よお身たれ
 ちる。世の系より志く。血脈傳承して。一女の承く。終る
 よ。受たると。わたりされ。天祖の詔る。またに。終結と
 乙祖の神と。伝き終ひ。流中の内教ハ。皇孫の流形よ
 して。即ち。天祖の神小ま。て。ひる。その。な。れ。の
 け。り。ふ。り。と。せ。ハ。乙祖の遺教と。思。な。り。て。内。子。と。教。ひ

天祖の大徳と事^ト修め上古とよ^アく^ヲ^ト吾人^ヲ衣令ら乃
源と用き^ル^ル仁厚^ノ源の糸く^もあき^かん^んと
行せ^る^ル^ル^ルのゆく^すて^て^て^て地あ^るん^限り
窮^した^りて^て四海^ノ東^ニ^至る^ルまで^も
^も神^ノの^旨た^くん^んの^血脈^ノを^守り^て
道^ヲを^行ふ^ル^ル 皇^ノ孫^トを^仰ぎ^まさ^り
同じ^く是^今の^朝 幕^府 東^照之^の血^胤を^流せ^る
て^て^て^て知^ル^ル^ル一^の邦^ヲに^をし^て 天^ノ子^乃
幕^府の^補を^充て^て世^ノの^君たる^者と^知り
改^メて^て^て^て已^んず^るも^も父^祖と^同ず^ること^を

知^ル^ル^ルと^も修^メ^ル^ルと^も志^トを^立て^る
陰陽五行

聖^ノ人^ノの^女の^交の^案事^ヲを^先き^て夫^子を^成る^たと^する^に
上^ニ帝^ノの^法を^依り^て陰陽^消去^の道^ハ易^ノの^書小^祥
中^ニ以後^の容^易と^もか^きあ^へり^しと^も云^ふ
東^ノの^霧乃^況ん^て天地^トと^死物^トと^て陰陽^ハ天地^ノの^精神^ト
ある^{こと}と^も知^るに^依り^て天地^ノの^活物^ナる^をと^人も^知じ
人^ノを^と知^るは^是と^論す^に天地^ノの^活物^ナる^故に^日夜^運
動^スる^るに^依り^て万物^トと^化生^ノ凡^ノ形^トある^{もの}
一^として^陰陽^ノの^氣を^兼り^て漸^然と^もあ^るは^るもの^ハ万物^ト

開聖漫録

天象と受つて始とたし又地象と得て漸結して一
 形とあり人爲物の民困も切た然れども徳括して一
 さいよ玉の物皆を地乃をちりあはと回象の物も受
 柔にして流初ハ八卦坎と水ハ坎ハ坤地の中より一
 陽と含るる回象して申す活初の象ありて地中
 二充滿する一人の體中血ありて一陰の漸る中
 二天象の陽也活きありて流動志く下下はち日月ハ
 陰にして水の括ありて陰ハ柔と含むるの象なり
 今も然る物象とて日象と受て光と生す濫ハ潮ハ浪
 と濫る何れも陰の漸るものなり是とて自然

と今む時ハ感して一象を生じ大太陽象の漸て炎熾る形
 状となり八卦ハ離ハ乾の中より陰ありて陽象
 象ハ漸して一象と生す一と地ハ充滿せる陽象有る
 其物ハ漸きて一象と生す一と地ハ充滿せる陽象有る
 一象と生す一と地ハ充滿せる陽象有る
 然ちつ論ハ象と吐く物より一光四象ハ一陰一陽ハ一
 陰象ありて陽象と象ハ漸して一象と成りて一象
 一象ハ漸して一象と成りて一象と成りて一象
 乃陰象と一象と成りて一象と成りて一象
 一象の陽象也一象と成りて一象と成りて一象

を施して法を乞と文範の始と智を坤の始と他を天
 地の初極の始と乾の始と坤の末と云々ありて
 事たり一初極の中より生じてるもの極物なり洪範
 の中より本と五行の二ありて本と穀を本と属して
 位を二ありて土爰稼穡より生ずる穀は人畜と云はれりて
 の功用乃第一なり他のもは本と云ふより稼穡のみ專ら
 本と属して是を人乃稼穡と云ふも人乃書よふ五行の
 外は穀を成て土府と云ふも人乃土を成て土府と云ふ
 ちれり穀を成と云ふも本と別は序たること二同と云
 の用は穀と生じてるものなり土府の稼穡陶器等の工化を用

むこととて田種を人の養ふことと重きとこれを挙げて稼穡と云
 るもかくの如く五行の生も成りも穀と人との必需の物
 たるは五材も土府と云ふ材と土府と云ふは皆民用を指
 する初なるものたる鳥獸昆虫水の初物も草木も土府
 とて民用を成せしもののみ本は成穀とて初物と穀とは
 るハ初物ハ地を能くく飛走遊躍して土府の養
 を受りて人乃生ずるものなり其のされは五の法は
 初なる物と云へば人の初質と云へば土府を考へ
 るべき也人の天地の中なる養と受けし地と云ひて
 土府とて天地の道を成すこととて地の宜す成補する

子ものるれ五形をまゝ采ひるわしてるもの徳物
 と云へ採ひてまゝはあらひ依て人の作用を云へる
 五事八政を極之徳水の九疇を借用して人の九徳のあ
 るら即ち水火の上下の性あるを同し萬物
 は皆偏重なり故に偏下されはきてせの美とされは
 偏下せ人の純柔をゆるおとす用をまゝに人の古
 来の天地の心と云く天地も人あるは身從ふらありて一
 ろまゝなり四肢と及を運用すれぬ一火の偏下矣
 とは日月の純柔の徳水の如くあり一箇れ用を
 用は他と異なるにありて一をいんをば子のまゝに四肢

五事を運用し人を天地の心と云て萬物をまゝに人の
 まゝに天地の心と云て地は人より有形物と云て
 形の名を呼吸し其の物を運じて日用し人天地合
 りて相離るることなく陰陽の用ありて
 一日月星辰の天の形あり山林河海の地の形あり
 陽の地の性質ありて其性情なり其大易に於て
 陰陽の精氣を散らして小西洋の雲を窮理の精
 密なるよ津とては天地の孔穴を論じて地乃
 性ありては其も知る陰陽の理は闕く天地の法物
 かりては其も知る天地を云て一をいんをば

何ぞと云ふて地のもをほらよんや孔子天道を評し
れよとつて今概くすくははひの咄やの言の縁
まふまのありきれども後人て地生もの運聖人深意の
意を悟らひしゝる密史の隠説は泥まじりて心きて始
管見を述るやう

高山集冷

する此地集を解きて大陽小近げきる集熱ひ可ふ
却て冷かす本居の末流を以て臨海の理やとて人の
又臨海を知ると云ふや地集漸結して大陽の光を受
る陽集を會むゆ之温熱を生ひるる此も本集集

て地集を解く一如温熱せし集金の金を夏日は思きく
時ハ熱く一熱ひ獲けし致金を石と解きくあつて思ん
熱い集もこの如一地集を解く時ハ漸結して陽を會
物とおをさるふおる中一夫集集たるをさる一是を
知りて臨海を解く一夏集集と解く一

稻荷社

小林文康曰山城國紀伊郡稻荷神社あり世の俗は社神
を神の名と曰ひ誤りて城又稲をく神と曰ひまじりなる
為の中れ稲より稻荷神社と誤りてする大神ハ宇加
稻荷魂神ありまじりける
こゝに依り男命の
稲をよまじりや 此は八道集

蒲生又義も山城國の福首山小松多々れ世伝狐を福
荷の神コシ居せりやうといへ世小松首社小狐の福首
多きといひ狐好て人の業を棄する獸なり人の福首
を福首といひ狐も又之業を棄して己の福首なりといひ
あり人より狐よく棄せらるる下野のまじりきり也

長崎諏方神社

長崎志元氣天正法南蠻國より渡る物宗大徳志元
怒之長崎神社不殘破却或ハ掃拂神道大表たる時肥
前佐賀小使も佛治志青木氏より金守院賢清日本
と神國なり家去崎小引へ物交と退治神道と再

興せむ憤激フビ以家族勿友松押イサに賢法曰神國の成り
志く神忠國忠をトケ事ハ何の難きものありんとい元和
九年去崎よりアケルふ名使もれたり西山村小島孫左
衛門又神道志ありとのあり事ありふりて為して神名
其奥の名を説く小孫志事共よきい回志の宗巴森城等
を招て候備古書傳言を語曰去崎法寺諏方大御神
社又信吉社森崎大権現天正交縁以切支丹子轉交せり
乃りよゆりく當社大御神ハ信ありの勅語也新虎克悪の
初大酒の地よ白衣の光の現信ハ悪執の字を國神乃
を以てて知ハ神社を毀ち構コホハ改新く信ありゆき

詔氏と見今大浦の地ふある詔方社に四柱あり又々後野
 母浦モウラは元海出流の流あり流る一或使船と云んそそ忽と
 云々客と云んそ云質法して哉一蘇代々神子の末孫九郎
 左志心を大村よりして為相縁一吉田殿一於寛永九年奉
 詔景吉川持立の詔吉田殿の詔状を以て詔中申出たれ
 江戸浪進あり聖子代友末次平家下知ありく西上り
 の内此地を寄附せられ之社同殿小勧信以十二年より神
 原氏神尾氏所中一の市中に改宗すれども宗將多き
 といふ改宗いふと云うべし一志志一焼殺一市中大他國の高
 人おと招き来て多社の神徳を崇めお礼を修せしむ

一と詔されたり人たふ思懐一命を興けられ毛次キツ神ワウ
 の御念やう備ふ道に帰懐一神を崇むの時に下人
 びく誅とあり一その位た多く於詔ふそ詔方高神
 乃奉礼始と神輿御旅行渡流也町中順書をら西人供
 の踊と勤め神樂所湯立流瀧馬ホの神牛の儀式を神和
 調了法人令く神徳と尊敬する事とたれり慶安三年と
 乃社地ふ掃るいどき話の志和哉壇浦通と大同一と長崎詔方社の事
 を記したれり氏の神と尊敬する事とたれり風俗たれり
 去儀の如く物やぬを信する事と神を敬する
 町八民の悦ばるる事とたれり一長久しく佛子御伏一夫

半地獄の尻民セシシ不潔セシシしたる如物流る民を迷ミヨひも
 彼ホツのホツなるホツのホツ天事地獄の尻をホツて佛説と擗ホツ一ホツ如
 説ホツも引ホツ入ホツ一ホツ祀宗の如ホツや如ホツをホツ其ホツ一ホツ如ホツも亦ホツといホツて
 を攻ホツるホツのホツさホツうホツ宗ホツの攻ホツと物ホツをホツれホツもホツ祀宗乃半
 見ホツ遠ホツ藏ホツ佛ホツといホツて説ホツひホツ一ホツ説ホツものホツを擗ホツてホツれホツて神
 社ホツと敬ホツ一ホツ儒術を崇ホツめ又是ホツをホツて物ホツを擗ホツてホツ即ホツち
 去ホツ時ホツ一ホツ方社の如ホツく一ホツ儒ホツを見ホツつホツ一ホツ又ホツ神道ホツ方ホツ古ホツ川ホツ一ホツ
 述ホツむホツ而ホツ押ホツ之ホツのホツ屋ホツをホツよホツ森ホツ地ホツあホツうホツ神ホツをホツ義ホツ法ホツをホツ好ホツむホツのホツ大
 乞ホツをホツ許ホツひホツとホツ之ホツ學ホツ士ホツ林ホツ氏ホツのホツ如ホツもホツ喪ホツ宗ホツ一ホツ世ホツ一ホツ儒ホツ礼ホツをホツ用ホツの
 佛ホツ説ホツと擗ホツ一ホツ及ホツ國ホツ一ホツもホツ會ホツ津ホツ一ホツ神道ホツと用ホツのホツ家ホツ一ホツ家ホツと

儒法を用ひし又佛前アミカ及アミカは足アミカ村アミカ學アミカ授アミカ伊アミカ禰アミカ小アミカ松アミカ丹アミカ波アミカ流アミカ
 心アミカも儒礼をアミカ終アミカ一アミカとアミカ神アミカをアミカ敬アミカ一アミカ儒アミカと信アミカするアミカものアミカ如アミカ也
 小アミカ述アミカ一アミカがアミカれアミカ也アミカ 祀宗アミカ此アミカ法アミカは活アミカ用アミカあるアミカ一アミカかアミカのアミカ如アミカ一
 今アミカ長アミカ崎アミカのアミカ一アミカ本アミカを擗アミカ録アミカ一アミカ人アミカ情アミカのアミカ向アミカ一アミカ而アミカをアミカ入アミカるアミカ子アミカ是アミカ也
 一アミカ既アミカも某アミカ寺アミカのアミカ檀アミカ越アミカと説アミカしたるアミカ一アミカ又アミカ某アミカ神アミカ乃アミカ氏アミカ子アミカと説
 せアミカハ如アミカ宗アミカもあらアミカて如アミカのアミカ説アミカ益アミカ一アミカ如アミカ少アミカ一アミカ也アミカ佛礼の制も立
 多アミカくアミカ一アミカ心アミカをアミカ以アミカてアミカ困アミカくアミカ一アミカ拒アミカ物アミカのアミカ意アミカをアミカ以アミカてアミカ廢アミカすアミカ一

功烈神祀

古アミカ大アミカ功アミカ烈アミカのアミカ神アミカ畫アミカ一アミカ祀典アミカ小アミカ列アミカ一アミカ申アミカもアミカ天アミカ兒アミカ屋アミカ命アミカ一アミカ河アミカ内アミカ平アミカ
 一アミカ公アミカ小アミカのアミカ法アミカ社アミカ一アミカあアミカりアミカたアミカるアミカ一アミカ命アミカ一アミカ六アミカ和アミカ島アミカ市アミカ一アミカ政アミカ安アミカ房アミカ國アミカ小アミカのアミカ社アミカあアミカり

思兼神オモカチハ武甕槌オホナムチノミコト又社有オホナムチノミコトアリ大己貴オホナムチノミコト命オホナムチノミコト出雲及此の國
 小多タケミカ一武甕雷神ツツスネ住津之神フツスネ東國を平定せしむ
 小見オミえられし常奥の地小麻呂香取社オミ麻葛マカ法ホウ子シ
 香取カク古コ見ミて他麻呂マカ香取カク社タ麻葛マカ法ホウ子シ
 是等コト時トキハ東國トヨキハ大功オホコトありし
 小豊城トヨキ入イリ命ミコト東國トヨキハ大功オホコトありし
 京師キョウシの時トキハ日本ヤマト武甕タケミカ香取カク社タ麻葛マカ法ホウ子シ
 去田相換アフリの時トキハ此の社タありし
 田村タケムラ唐タカ呂リ東トウ夷イを討ウチ平ヒラけ 曠野クワンノの時トキハ
 代ヤ一ヒト々タ遂ス津ツ羅ラの山ヤマ邊ヘに退ヒくスるル然シカハ常陸トコノ奥ウチの地チ

名祠大社ありし記曲カキマツは別ワカたきし也今イマ常陸トコの合カめメ権ケン
 現花園持現ハナヅミた田村將軍タケムラノを奉ホウると云イハ傳ツタへ又陸奥リウオウは陸奥リウオウの地チ
 田村タケムラ將軍ノの祠タテマツ多タ一ヒトと云イハたれハ何ナニ也ナリ又マタ社タの正マサ祀ヒツリと
 田村タケムラ又マタ也ナリの祠タテマツと合カ祀ヒツリ一ヒト氏ウヂ心ココロをシ崇ホウめル又マタ孝徳コトク
 の時トキ 天智テンチ帝ミカド攝政セツセイ一ヒト時トキハ阿ア陪ヘ比ヒ武ブ支シをシてお
 陸リウの蝦夷エミシと征セウせられ後ノチ方カタ羊蹄ヨウテイは政セイ取クをシて肅ソク然ゼン小通コトウ
 せし一ヒトの大業オホノノたれハシシベベ山ヤマノ祠タテマツをシて蝦夷エミシと征セウせられ
 せし一ヒトと庶幾コトチガふ也ナリと記曲カキマツの事コトもまよふ事コトも
 神武カムヤマト天皇ミカド 天智テンチ天皇ミカドハ大徳オホトク中宗ナカノミカドハ
 石清水イシノミヅの制セと斟酌シヨウシヤクありし宗廟ソウボウと立タテ給タマふ事コトも
 石清水イシノミヅの制セと斟酌シヨウシヤクありし宗廟ソウボウと立タテ給タマふ事コトも

しとても卑賤の者悟るはあれは論せし名賢の初字も大織冠
ハ多武時^{タムラシキ}安公^{ヤシキ}の所ある如く栢氏^{カキ}は内子新田氏^{ニウタ}は之跡^{ノト}也
兼地氏^{カニヂ}は紀後^{キノチ}源唯房^{タケノサト}は伊勢常陸^{イセノサト}に祀^{マカ}りて此の名賢^{ナノト}は其の
國^{クニ}に祀^{マカ}りたるんよこの心を興記^{キヨキ}するの一事^{コト}なるべし

天皇人せむる無滅相反

神おは古より我と^{ワガ}天皇人^{テンノウヒト}と稱^{ナヅケ}りて天皇^{テンノウ}よて^セ生^{ナマ}る必滅^{カナラシク}と云
ふね反^{サカサマ}するは是^{コト}天地^{ツチノカミ}の自然^{シゼン}なる事也^{コトナリ}東方^{トウホウ}は陽^{ヨウ}の邊^ヘの故^{ユヘ}
初^{ハジメ}とて如^カく生^{ナマ}る事^{コト}あり和樂^{ワガク}して勇猛^{ユウメイ}たり西方^{セウホウ}は陰^{イン}
の邊^ヘ故^{ユヘ}とて如^カく死^シる事^{コト}あり陰^{イン}を主^ヌとして人^{ヒト}情^{ニョウ}風俗^{フウソク}冷^{ヒヤシ}寒^{サムイ}
孤沈^{コシツ}鬱^{ウツク}せしむる如^カく活^{イキ}きたり^{ニシ}刻^{コク}して陰^{イン}陽^{ヨウ}たり^{ニシ}如^カく

道^{ミチ}といふはも東方^{トウホウ}は天地^{ツチノカミ}の生^{ナマ}る物^{モノ}となごりて生^{ナマ}る氏の備^ヒ也^{コトナリ}
西方^{セウホウ}は天地^{ツチノカミ}の滅^メする物^{モノ}となごりて死^シる氏の福^{フク}也^{コトナリ}
の陰^{イン}陽^{ヨウ}也^{コトナリ}天地^{ツチノカミ}の自然^{シゼン}なりて^{ニシ}也^{コトナリ}の^{ニシ}也^{コトナリ}
天地^{ツチノカミ}の初^{ハジメ} 伊弉^{イサ}母^{ハハ}の陰^{イン}神^{カミ}なりて日^ヒを主^ヌとして^{ニシ}也^{コトナリ}
とありしと 伊弉^{イサ}諾^{ダク}の陽^{ヨウ}神^{カミ}なりて月^{ツキ}を主^ヌとして^{ニシ}也^{コトナリ}
を主^ヌとして^{ニシ}也^{コトナリ}の^{ニシ}也^{コトナリ}の^{ニシ}也^{コトナリ}の^{ニシ}也^{コトナリ}
あれども生^{ナマ}るに死^シるより多く人^{ヒト}民^{タタ}衆^{シユ}息^イは^ハる^ルも^モ天地^{ツチノカミ}の^{ニシ}也^{コトナリ}
よハ生^{ナマ}るを^{ニシ}也^{コトナリ}と^{ニシ}也^{コトナリ}と^{ニシ}也^{コトナリ}と^{ニシ}也^{コトナリ}と^{ニシ}也^{コトナリ}
人^{ヒト}も禽^{イナシ}獸^ノも生^{ナマ}るものも死^シるものも又^{マタ}然^シりて^{ニシ}也^{コトナリ}
滅^メする^ル死^シる^ル業^ノ枯^カる^ル中^{ナカ}に^{ニシ}也^{コトナリ}と^{ニシ}也^{コトナリ}と^{ニシ}也^{コトナリ}
生^{ナマ}る^ル事^{コト}なり

たるを初しひア年よ四時あり春ハ生一冬ハ枯る冬あき
 されハ春は回^カころあきさいも生葉ハあきまじり
 きの黄葉ハ冬枯の中子^カ籠^コア冬よ一陽来^{ライ}復^{フク}ハ草木の
 枯^コもあき枯る枯る枝よ冬を結^ツい地子^チあき再^シい滋^ジ
 ささる萌芽^{ホウガ}ハ枝よの交^カかれ地^チる生葉充滿^ニ永久
 連綿^リくあきころ^カ是^シと生葉必滅^ニ云^フべくもあき
 聖人の書も^カい^ハて^ハ一^ハ書^ハ易^ハハ見^ル中庸^ニも天地
 の通^シ可^ク一^ハ而^シ也^ハ其^ノ為^ス物^ノ不^レ貳^ス則^チ其^ノ生^ノ物^ノ不^レ測^スと云^フと云
 一滅^スを^シて^ハ以^テ神^ノ代^リの^ニ生^ノ人の^ノ家^ニと^シ符^ノを^シ合^セた^ル也^ニ
 然^レも^ハ西^ノの^ニ陰^ノの^ニ國^ニに^テ陰^ノを^シた^ルハ^ハ并^ニ滅^スと^ス也^ニ

て生葉必滅^スを^シて^ハ生^ノ人^ノの^ノ死^スも^ハ前^ノより^ハ生^ノ葉^ノと^シ後
 に^テ傳^ハぶ^ニ世^ノあ^リて^ハ此^ノ地^ノの^ノ自^ラ然^ノな^リと^シ知^ルる^ニは^ハ春
 こころ^ハ一^ハ身^ノの^ノ苦^シ樂^ヲを^シて^ハの^ノ切^ナき^ニあ^リて^ハ生^ノ葉^ノ病
 死^スを^シ念^ハひ^テ然^レも^ハ健^ニし^テ死^スと^シ解^シつ^テ死^スと^シて^ハ
 こころ^ハ一^ハて^ハ死^スは^ハ楽^ノ界^ニあ^リて^ハと^シ死^スと^シて^ハ播^クる^ニも^ハ生^ノ葉
 と^シて^ハ死^スと^シて^ハ出^ル地^ノ扶^ル持^ル事^ノの^ノ得^ルと^シて^ハ出^ル
 こころ^ハと^シて^ハ死^スは^ハ目^ノみ^ルも^ハ死^スの^ノ思^ハは^ハ情^ノの^ノ暗^ク也^ニ鬼^ノ物
 を^シて^ハ生^ノ葉^ノを^シて^ハ合^シく^ニ已^メの^ノ控^メ料^ニに^シて^ハ死^スと^シて^ハ不^レ滅^ス
 乃^ハ水^ノ初^メと^シて^ハ生^ノ葉^ノを^シて^ハ眼^ノ前^ノの^ノ長^シ居^ル也^ニ婦^ノ長^シ切
 朋友^ノと^シて^ハ村^ノの^ノ假^メ合^ハを^シて^ハ生^ノと^シて^ハ將^テ去^ル也^ニ世^ノと^シて^ハ火^ノ也^ニ

若の安海の杯と稱し一をくせと樂まひて是を
 厭ふむ人の子も喜ぶあれとも又ハ苦く其の多きを
 知りて父母の子を愛す子孫にやと徳下の教を
 見らあうと士民を喜ひ是と治り冠礼を止め年記と
 種を患害を免れめ夫婦あやして男女室は居り祀
 先の後と過ぎ父母小事へ子孫と喜ぶ兄弟あやして同
 く父母の徳下を喜ぶ育せられ死喪急難はたふお謀り朋
 友あやして志と固くして相変る是皆人世の樂也又人の
 の終りも嬰孩よりして日ふ去り一命皆日強く知識日
 に昇け學ひ習ふく日ふ熱く冠婚よりして仕官化業

凡人るよつきて勅考あれども名を歎まはるるを人令れ
 ちりて衣服住みの學と飲食悉財あやと終り商人の
 中ハ父苦艱難もいれども多業人を通親とれ、康寧
 其事やるハ多く終奉憂戚は沈むわハ憂戚あるハ日
 物事憂戚のともあはれ起きそ日の光成作き合時
 ふハ父母妻子に飯と食ひ一家又ハ他人の交りよも公
 子けり後任よハ服衣破産も寒暑は堪へ雨雪と過
 けり身中應へたる産業と學とて十日と通親すれば
 平和なりてくるたに時利糧告の時より多し少ハ威と
 してたふ愛るが事その時も憂愁あるはくたふこと

去は笑の及せあつ月日の光を更へて光を生ひ日の光に
 ちりの光あつてふも光あふらつて夜を盡し能くして
 日の中ふ包まぬ夜の夜に朝日にしつて光に二百たれを
 目と教へて教へて教へて初極の物配 林にてもさすの神
 めして又死なれは生を子に傳へたるの外に死道とい
 らるる人々理なり 人は遠を去りて足すや死道と
 らるる及も人の故ふ孔子も未知も其知死との事なり人道
 と生と知るよきをのちや死や生と説くは臆度より出
 ぶやうらりして生を去りて人倫は盡すなり 生を去りて死
 ちとて生も事なり 死するも人倫のあつて生るも事なり

切はちと片時も生るゝといふこと地極論せり人の生るゝ
 世も生るゝは生るゝ人の生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ
 生るゝ 伊特論その神徳と生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ
 生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ
 まく生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ

性善

性善の性孟子と論せりこと詳なり後人の論と生るゝ
 生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ
 あれは性善と生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ
 然とも性善なり孟子と生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝと生るゝ

六天の教ジヨたる所たるは其の善なるもの也孔子は性相近と
 云ひて又人の性也直と云ふは性也と云シて直の
 も多ければ其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直
 大親する時にその性も直なるものなりと云ひて即ち性の善なる
 性も多き中にも不善のものもあれども悪くても其の性も
 ようやく其の性の善なるものも多き中にも不善のものもある
 といふは其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 奥の人も其の性も不善なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 此情たるは其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 あつて其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの

必ありて其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 悪くても其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 悪の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 とし其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの
 其の性も直なるものなりと云ひて其の性も直なるもの

人と通説をて人の性念欲乃性と異たるををて性
 弊て是を善なりと善を善の善の善を善と悪自ら
 消人の人より善て樂て善より善なりと善の善也性悪の説
 ちて下の同きはと大親を人くふ就く細説く一善を
 換くく悪きと善くく下の人を悪と善く一善を
 一悪と善くく一善と一善と消の善を先く一人を
 未傳く一強て矯採ひるに違わし易の泰否二卦より善
 を大く一人と小く大親を善く大也細説ひる小也性
 善の説は善の善なり性悪の説は善の善なりと善の
 説は善の善なりと善と立たるは性善の説は善の善なりと善の

之論を云へ

天命

を世移すの説と如くものありていぬらふと論
 一善と一善と一善と一善の託をちちといふ湯武と指
 て善くも古く人の善の善と善くく一善と善命を所
 とはるは善の善の時より一善帝載も天人なり然り
 亮天地としちく一善位は自己一人の位非す天帝より代てそ
 事業を廣むるも職なりは自らもよ命せらけり也故
 てもよ善徳なり一善を善と討ひると天命を討ひると
 一善くく唐虞の代よりいれり湯武の故依りて善なり

災^{カン}涉^{シヤク}せし本^{ホン}より泥^ニとく^コ災^{サイ}はあらば又^{マタ}信^{シン}はたき^キ道の福^{フク}
 善^{ゼン}福^{フク}法^{ホフ}を^ヲ就^{ジュ}て善^{ゼン}人^{ニン}より福^{フク}を^ヲ獲^{カツ}て悪^{アク}人^{ニン}より福^{フク}を得^{トク}るもの
 多^{タカ}きを^{シテ}物^{モノ}の^チ貴^キ重^{ジュウ}の^チ類^{レイ}を^ヲ引^{ヒキ}て^{シテ}論^{ロン}を^シるもの^{ナリ}
 是^{コト}も^ハ知^チる^{コト}も^ハ地^チの^チ大^{ダイ}小^{ショウ}を^ハ知^チる^{コト}も^ハ天^{テン}の^チ大^{ダイ}小^{ショウ}を^ハ知^チる^{コト}も^ハ下^カ
 へ^{シテ}別^{ベツ}る^{コト}も^ハた^カら^ズて^ハ小^{ショウ}整^{セイ}を^ハた^カら^ズて^ハ成^{セイ}得^{トク}る^{コト}も^ハあ^リ
 る^{コト}も^ハ一^{ヒト}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リ物^{モノ}の^チ情^{セイ}也^{ナリ}と^{シテ}鳥^{チウ}獸^{ジュウ}を^ハ本^{ホン}の^チ心^{シン}を^ハ
 網^{コウ}羅^ラ臨^{リン}陣^{ジン}を^ハ投^{トウ}ぎ^スる^{コト}も^ハあ^リ斧^フ斤^{キン}水^{スイ}を^ハ敗^{サイ}ら^ズる^{コト}も^ハあ^リ
 不^フ存^{ソン}高^{コウ}一^{イツ}が^ハ人^{ニン}の^チ孝^{コウ}不^フ孝^{コウ}も^ハか^クの^チか^ク有^{ユウ}生^{セイ}の^チ福^{フク}命^{メイ}を^ハ
 受^ウけ^テる^{コト}も^ハ學^{ガク}問^{モン}ある^{コト}も^ハ天^{テン}の^チ心^{シン}を^ハ信^{シン}ず^ルも^ハい^はら^ズる^{コト}も^ハあ^リ

天^{テン}に^ハ至^シ大^{ダイ}た^カれ^ルハ^ハ善^{ゼン}物^{モノ}と^{シテ}覆^{フク}音^{イン}は^ハる^{コト}も^ハあ^リ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リ善^{ゼン}物^{モノ}お^のつ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リ死^シ生^{セイ}榮^{エイ}枯^コは^ハ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リ自然^{ゼン}に^ハ任^{ニン}じ^ルる^{コト}も^ハあ^リ教^{キョウ}訓^{クン}の^チ短^{タン}命^{メイ}の^チか^クも^ハ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リ保^ホ持^チと^{シテ}自^ジ由^ユと^{シテ}天^{テン}壽^{ジュ}を^ハ得^{トク}る^{コト}も^ハあ^リ
 思^シ時^ジと^{シテ}失^シひ^ル風^{フウ}雷^{ライ}水^{スイ}旱^{カン}の^チ災^{サイ}ある^{コト}も^ハあ^リ天^{テン}の^チ心^{シン}を^ハ信^{シン}ず^ルも^ハ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リて^ハ耕^{コウ}種^{シュウ}收^{シウ}獲^{カツ}皆^{ケイ}
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リて^ハ散^{サン}落^{ラク}と^{シテ}も^ハあ^リて^ハ殺^{カツ}る^{コト}も^ハあ^リ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リて^ハ泥^ニと^{シテ}汚^{ケガレ}ら^ズる^{コト}も^ハあ^リて^ハ人^{ニン}の^チ後^ゴを^ハ充^{チウ}つ^ツる^{コト}も^ハ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リて^ハ酒^{シュウ}酢^ソお^のつ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リて^ハ類^{レイ}を^ハ振^フる^{コト}も^ハあ^リて^ハ心^{シン}を^ハ
 一^{イツ}つ^ツり^ツる^{コト}も^ハあ^リて^ハ貧^{ヒン}富^フ申^{シン}る^{コト}も^ハあ^リて^ハ使^シと^{シテ}使^シる^{コト}も^ハあ^リて^ハ子^シを^ハ持^チて^ハあ^リて^ハ

近世キヤウシ之シ舜のゼンキヤウ禪讓とハカギ詩讓とあるものありは既に
 天祖の皇統ウツク正統と論ずるに極く是を以てはれども是を以
 て堯舜を詭譎ヘイコウひるはると知く之を知らずはるなり凡天
 地のつら一民二民の理ありて大に二日を以てのやくを以てきき
 之のハ一なりを以て然きものハ高も地四海も万国多しと
 以てなり 天祖のやく皇統正統之國ありて之他エキハ易
 姓革命セイヤク多し國なり是何然ナニとあるは古初より 天祖之意
 を 皇孫ウツクに傳てて之を授けりしより 君臣キミのまかひあり
 て天壤テンニョウと窮キウありてやくホウキヤウ寶祐ホウキョウを指て吾とんらるやくせんと
 宣ひしより父子の親譲シンニョウとておふらるや一ち初ハツよりして

又臣父子の大倫ダイリン嚴正ニヒニカウ慎シニ居カウちるは万国マンコクハ法倫ハツリンなりが
 のやく貴き國クニは地チなるより神カミのやくありて至て是き
 ち二ニちの道理也とて万国マンコクハ論リンはるは是のハツ洋ヤウ去キは
 神カミありて人倫ジンリンなり万国マンコクハ是のハツ建國ケンコクの體
 神ありて民タタとて一民と仰オホきなる漢カン去キ一人を以てて其民
 を治ると奉ホウとて次村ジヤムラと邑イと治るとのやくありは之
 皇ウツク五帝ゴテイ代ダイるは興キョウく其世とて治チはるの舜と奉ホウ一
 り之志と繼ツグて治功チコウを成ナゲしと見て位イを讓ニョウて舜の禹
 を奉ホウ一は是も同ドウと治るとなるはるはる万国マンコク體テイの本ホン
 一ヒト同ドウかゝるはちこれと執シツて論リンはるはるは又カハシ慎シニ居カウちる

するもの小玉の舞は竟の位と奪ひ高の舞の位と奪へ
 了と云ふは此舞採り人の狂文破客のあやをばく。ゆく
 目と極て罵言はるるをばく。て實に実事ある。これ
 全く臆度をばく。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 るふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 竟の天下と譲る。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 あり。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 を受て。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 るもの。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 永く。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

譲る。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 のゆく。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 志。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 二女と嫁。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 賓。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 此。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 是。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 位。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
 先。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

るハ智術を以て虚飾はるるも亦一天下を傳ふる如き
 大平天子と云くハ十日の祀る西十子の拾人而一人の如きと云く
 天下の目録掩ひ難く口は九ありて其も亦さけと云く
 奪の跡ハ君師を以て掩ふつてハ其も謙の辯ハ事ハの
 編せりて自ら明きなり

孔門弟子

孔子学と好て考を辨を祖述一文武と憲章一東周乃
 道を再興せん志強ひて其も亦さけと云く
 采氏強強ふ一人と教育と云ふ材の去はる亦さけと云く
 の才徳を成就す志を以て東周を起しり一人と云く

少は謙は謙たる多は股は心強と云く一道は道と云く
 及くつて其も亦さけと云く考四方を教授し孔の如き人を切
 拵て其も亦さけと云く一徳と云く其も亦さけと云く
 云々の如く其も亦さけと云く其も亦さけと云く
 其人亦さけと云く大目亦さけと云く其も亦さけと云く
 論語中亦さけと云く其も亦さけと云く其も亦さけと云く
 其も亦さけと云く其も亦さけと云く其も亦さけと云く
 唐河疏の考亦さけと云く宋程朱性理の學亦さけと云く
 沈亦さけと云く明王氏の學亦さけと云く神亦さけと云く
 其も亦さけと云く其も亦さけと云く其も亦さけと云く

戸を法で黨同伐異^{トウクバツイコ}なり相戕^{ライタイ}排^{バイ}志^シなきハ敵^{テキ}讎^{シウ}を
 たりある是皆其流^{リウ}に從^シて其源^{ゲン}を忘^スる也此^{コト}流^{リウ}の紛^{マギ}れた
 りたるもの源^{ゲン}に訴^{カガ}ふ可^カい何^{ナニ}れども同^{ドウ}く孔^{コウ}子^シの言^{コト}を以^モて聖
 人^{セイ}と^シて視^シる時^{トキ}ハ直^{ジキ}路^ロ游^{ユウ}夏^カの二^ニつ^ツは兼^{ケン}る^ルも^モ何^{ナニ}れども
 り^リ人^{ジン}たれ^レハ相^{サイ}親^{シン}む^ムと^ト兄弟^{ケイテイ}のや^ヤく^クち^チな^ナり^リは^ハ見^ミおの^ノ異^イ
 同^{ドウ}ある^ルも^モい^ハく^ク遊^{ユウ}交^{カウ}互^ゴふ^フは^ハ言^{コト}を^ヲ述^シべ^ベの^ノ如^ニく^ク平^{ヘイ}心^{シン}よ^ヨり^リ
 言^{コト}を^ヲ求^ムむ^ムと^ト求^ムむ^ムの^ノ以^モて^テ縦^{ジュウ}令^{レイ}令^{レイ}を^ヲ行^{コト}は^ハら^ルる^ルも^モあ^リ
 る^ルも^モ古^コと^シて^テ強^{キヤウ}て^テ雷^{ライ}同^{ドウ}と^シて^テ求^ムむ^ムの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}姑^コく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジ
 氣^キ成^{セイ}聖^{セイ}意^イ小^{コウ}質^{シツ}し^テ可^カなり^リ聖^{セイ}を^ヲ去^スる^ルも^モ數^{スウ}を^ヲ裁^{サイ}た^ス
 ず^ズも^モ論^{ロン}語^ゴの^ノ書^{ショ}あり^リて^テ今^{イマ}の^ノ法^{ホフ}中^{チュウ}子^シと^シて^テ小^{コウ}親^{シン}と^シて^テ聖^{セイ}

人^{ジン}ふ^フある^ルも^モ一^{イツ}中^{チュウ}に^ニ就^{ジュウ}て^テ互^ゴに^ニ復^{フク}玩^{ワン}味^ミし^テ終^{シュウ}に^ニ窮^{キウ}きて^テ長^{チャウ}
 け^ケる^ルも^モ是^シを^ヲい^ハふ^フに^ニ施^シして^テ一^{イツ}に^ニ依^イる^ルも^モあ^リ
 然^{ゼン}と^シて^テ論^{ロン}語^ゴを^ヲ論^{ロン}じ^テ一^{イツ}他^タは^ハ世^セ法^{ホフ}傷^{キヤウ}の^ノ流^{リウ}く^ク本^{ホン}の^ノ如^ニく^ク是^シ
 を^ヲ緯^ヰと^シて^テ考^{カウ}考^{カウ}し^テ可^カなり^リ是^シれ^レも^モ一^{イツ}身^{シン}も^モ法^{ホフ}傷^{キヤウ}
 も^モ其^キの^ノ孔^{コウ}子^シ乃^ノ子^シなり^リ互^ゴに^ニ兄弟^{ケイテイ}相^{サイ}親^{シン}む^ムと^ト弟^{テイ}人^{ジン}自^ジ
 を^ヲ論^{ロン}じ^テ一^{イツ}の^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジを^ヲ論^{ロン}じ^テ一^{イツ}の^ノ如^ニく^ク相^{サイ}
 不^フ意^イと^シて^テ相^{サイ}傳^{デン}ふ^フと^ト其^キの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジの^ノ如^ニく^ク
 る^ルも^モ一^{イツ}の^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジ
 く^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジの^ノ如^ニく^ク弟^{テイ}人^{ジン}自^ジ
 思^シ不^フ出^{シュツ}と^シて^テ位^イ

綱目録

七六

國の私を以て優游志して居るに空氣のふよみのにけり
 才の私を以て然ハト下りて六政治の得失を知るあり而
 の位不當なるありはるるのしきよりのしきとされし論
 語中、教訓を始として事なれ政は善くせばめと政治
 乃同をを載たるる甚多し是を以て見る時ははるるの学
 ぶもの己の位の庶人と異なるるを悟るべきなり

聖賢勅實行

聖賢の空論と好ましくして実行と貴ぶる人の志業も時處
 位不當たりし言はれを初め孔子の時に周道衰たつて
 も文武の道ある地は遠くありて人々あり孔子の聖と

魯公と依り周公の法を倣て周室と夾輔し終つて六の
 子ハ成徳達材の要ふところ多し流したる者も材ふもの
 つて何用やれハ周道再興して万民太平の化は治一東
 周とありし志と遂げむしとを互ひのやくかりし
 是を孔子志を得しむし必おしぬる実行也て道行しを
 是ふ及し待書禮樂を修め易成帝て春秋と絶了た道
 徳のよしと美せよ本報たふし志とありしとてし下位ふ
 をく行ひしははの実行あり孟子の時よむくハ周室
 微弱ありて力のやくせよこのやく我國の世にたる同を
 再興しることを得しむしは法假力奉志して民塗炭は苦む

孟子ハ徳作ト説テ文王の政と稱シヒ哉とあるコトは故んとシ
湯武の政ト説クるやハ天啓の大義ト於テ刑トレテ之レ也
されども固シモシ樂付ルやと無慮トカレルハ孟子ノ言ニ本
於テ伐クるコトハ仁政ト稱シテ天下ノ民ヲ歸セズレ也
又ハかくシ月ト杞宋ノ如ク之レの礼ノ立テ無クヤレ也
天啓ノ如ク 寶祚ノ隆ニシテ地ニ窮ルヲレ知ルトシ下
乃ハ勢ヲ變シレル也ト 玉ヲ引クルコトハ端ヲ引クテ 古ノ勢
事ノ天下ノ政ト稱シルコトハ易クヲレ知ルルコトハ周
天地ノ理ニ 神妙ノ如クシテ他ニ治レ倫ヲ知ルルコトハ周
未戰ノ國ノ世ニ於テ以テ得ルコトハ孟子ノ言ニ本

小智ノ如クヤレんコトハ思ハルコトハ孟子ノ志ヲ得テ必ズ然ルトシ欲
ふル事ヲ行フ者ハ異端ノ害ヲ孔子ノ時ニハ先ニ氏ヲ探ル者トハ
とも其害未ダラズニ廣ククシテハ異端ト改メルコトハ害トシテ之レの
事ハ以テ一ニ以テ攻キ辯論シテたまニ以テ孟子ノ時ニハ揚子
朱墨等許行者ノ異端ヲ説ク以テ聖人ノ道ヲ害スルコトハ
ことハ方々々ニ以テ孟子ノ時ニハ辯破スル論ヲ放チ邪説ト息セス
めテ大道ヲ天下ニ後世ニ明クシテ後世ニ是ト稱シテ功高ノト
ふハありシトシ是トにシテ志ヲ得ルコトハ以テ稱シルコトハ
以テ其ノ事業孔子ト同クカレルコトハ時ニ於テ位ニ
よりシテ救フ者ト急務ト身ノ得ルコトハ亦ト行ハルコト

之実行よりて空論のありきなり唐の時佛法行れて人
 の或迷へれば韓退之出て其人道のありきと論
 一佛骨を宮中へ入るを止め且其人を人よりけり
 唐の世に云ふは下瀬感するもの多し
 子操滅せられん或得られども後世具眼乃人と興起せし
 る其功ありきなり一の宋の代は初宋以上の法儒力を
 盡して佛を排撃し其或操滅し得んといふ人其世道
 を害するを論せしを見て人心を驚費するをいふ
 此皆空論のありきなりて実行の印 神ありて慈澤
 水の現其本は言あるを論する世に惑と解あり

として初代に害後世に益し深く切迫也佛の言は楊墨より
 深く近せよとて洋教の言は佛と同日の論あり佛の
 意は法と弘く衆人を救済せむるをわき洋教は人々を
 倣て其國を奪んとし初め西遊し入て程なく畿内より法
 國より行りて豊后大宰其教を定めて海外に遠近し
 東の空嚴禁を設て誅戮し終ひ 大敵をよみてあり穢
 滅せし其は俗々天下の民國家の嚴禁よりて極て弊
 悪なるを或知りき俗々のありきも 校塾の我夷の詐
 る語をれい流弊と設て陰に或と煽誘せん禍を包蔵
 して肺肝と見らるや 然るも近來洋学世に流行る

人て地人の道も信く安小洋夷の窮理とて天地と死物
 たる僻説と工藝の巧と醫術の病源と論せし
 流小速劫とふし極のつまは眩惑とて人偏も礼義も不
 脱也と指す聖人より遠きるややくさひやうんとて陰
 小洋夷と尚慕はらんとせしむる日洋夷の地の出來
 たる小島して洋夷の極域とて遠くありていかに
 思ふものや袂と引くのみ相率て夷小島に下りて是
 民と驅て外虜の掌握に歸せしむるは兵書も人を
 敵の美と況のむむと勿れとて即ち是れ佛法の
 僧格林心と書して邪説の害と論して曰く欲各首傳

教夫天主教絶滅倫理廢弃綱常愚者即以耶穌之邪説
 盡惑其心智者即以取中國之金銀要法其心不數年間
 邪穢之物流流行孔孟之正道不作正氣必不成世界矣
 一旦舉事則愚者盡惑已甚智者要法已深中國人必反
 為賊國非藉寇兵而何其害何窮也殷兆鏞もまゝに
 了者首小洋夷して邪教を傳る害と論はるや大意是る
 同是是流法と傾覆せんといふし又洋夷を以て武を
 結しよあつた者志之と國家を扱んた相たふ力を殺せ
 心とつて洋夷を辯破し淫穢と扱ち邪説と息め
 んといふは獲夷の獲謀詭術を未だ拒き即ち上云儀

謀と云ふものかれハ當今の急務といふ一邪説の害孟子
 乃時より唐宋ハ甚しく今ハ唐宋より幾子倍といふ
 ち一らひはまを政刑に領しきれそのハハカと事一
 邪説を拒くと時處位は當りてこそ此得行ふに本
 ハ實行より空論よりゆるる

孔子討陳恒

孔子の陳恒と討んと徒然の
 ハ與せしハ魯の亂とて魯の心ハ人ハ未だ
 ちよふし一討つるハ之ハ魯と弱國ハ侮る
 ちハ其不立ハ必勝の機あり論辯一信ハ不哀公困

ふとあるは一るハ傳ハ詳ならず然る後儒於て
 されハ孔子の意ハ義とてセハ一ハ力ハ
 云孔子の陳恒と討んと一徒然の
 子ある言す一徒然の義と論一
 徒つるを得り一ハ賊と討つる論一
 信るを哀らふ昔ハ勅屬一徒然の
 疾一ハ無謀の戦を一武を濟海ハ殺
 乃るハ一信ハ故ハ無席憑河一死
 ものハ一セハ一信ハ一謀を好
 んものハ一徒然の義と論一

をわたり終るやふる見つる一後儒の義と以てして
 とめて世に伝ふる一理あるやふる一開ぬれり空論
 よして安んずる事ありは時際テイヤカの風とを以て國家乃
 禍を成すに中なる論を研詳する又をこれに安
 じ暑に力志の六空論用議を好むり一其に安んずる事
 くらぬ因ハカなり

周易象義不可執一論

世儒周易を説くもの多く、易れ書と清虚よりて象物か
 りと貴しコト盈満エイマンと戒め流下して身を保つことと多し、
 一其に安んずる事ありは時際テイヤカの風とを以て國家乃
 禍を成すに中なる論を研詳する又をこれに安
 じ暑に力志の六空論用議を好むり一其に安んずる事
 くらぬ因ハカなり

を知るは大方なり、清虚象物かふる時り、剛健
 活動カクドウとくき時り、六十四卦とる、十四支一卦一爻とる、象
 義各異コト、一動静語黙ドウセイゴモク皆一時り、申るを以て、
 清虚象物かふる時り、六十四卦とる、十四支一卦一爻とる、象
 義各異コト、一動静語黙ドウセイゴモク皆一時り、申るを以て、
 況るや、盈満と戒め流下して身を保つことと多し、
 一其に安んずる事ありは時際テイヤカの風とを以て國家乃
 禍を成すに中なる論を研詳する又をこれに安
 じ暑に力志の六空論用議を好むり一其に安んずる事
 くらぬ因ハカなり

直方わつ地徳ししくはるは蒙蒙さう五八上位かれやも
 蒙ハハふまふものちう蒙のふまふ物もの衣ちう靴と衣
 としう蒙ハ衣ハ後ハ陽施しう陰承く靴と伸や象
 義皆別ちう屯ハ屯旅ちう物始く生一 天造る味
 ちう蒙ハ蒙くして物の解きちうかくのやく每卦象
 象皆別ちう君子其象と取て屯旅の時ハ屯旅相尙
 としう解ちう象味しう物の解き時ハ言はるも是も相
 當ししうこれやく每卦每爻乃象象時しうて各其口手は
 ちれハしう解ハ皆是ハ相尙とさしう ちう四卦あるハ六十四卦
 の解ハあつとる ちう四爻あるハ六十四爻の解ハあつとる

て他用の度きしと章吉もあつとるしうは然るも徳の八卦
 ちうと取て易ハ全方とあつとるは易はちうものちうしうは

君子教子

君子のちうふまふものちう古今のちうは道徳しうて世乃人
 ちうと解ちうものちう然るも世無徳と唱ふものちうあつとる
 人ハ解しうはあつとる限ちうのちう作しうてやぬと解しうはや
 ちう是流ハ章吉も解しうておのちうまふ異論とさつとるは
 ちうて實事申あつとるちうて眼前のちう又心のちう嚴ふちうは
 ちうちう亦教財ちうしう多知申あつとる不肖ちうてちうちうあつとる
 ちうれちうなる人を通觀しうて人のちうしうてちう象解とん

乃其教のつとせよスナハ。ぬらふ後教育シヤはよりシヤ士庶の差シヤ
 別ビありしを知らず。庶人の力を考へて人を治らざるものれ
 び人其學を以て流布せしむ可きや。其れを考へて人を
 治むる地位チをいへば、不學ふべし。己の地位とありしとありて
 以論志の次は市井セイの學をいへば、聖人の道を知らざるも固
 より責る小異し。以聖人を道に任じし仁己を修めし推
 て人をも治るをたつ己を修めざる身の國者の治を修めざる
 ひそひるよありしと治るふを以て、聖人の仁政の深意を
 學得て撰範センせしむるもの、これを行はざるありし故にこれ
 乃其教も文行忠信をいへば、行と忠信に其自ら修むるあり

志て學ふべし。文も亦久の詩書礼樂。聖人天下を治るの文章
 也。是博學ヒロク審問シムモン慎思シンシ明辨メイベンはよりありしを得ざるありし故
 故論語より學文も博學ヒロク行文も博學ヒロク我の文ウチノモノを學
 ぶるありしをいへば、聖人天下を治る文章を知りてありし人
 を治るも撰範センせしむるべし。仁を實行し施ししとほひ仁の
 實に是き。其の要家ありて市井セイ俗學の知るありあり
 せしむるべし。

尊王撰夷

尊王撰夷ソウオウセンイ。天下の云論をいへば、仁を以て
 とも多かるる。其の論をいへば、仁を以て

臨時の款納もサのハ扶桑拾葉の遺意もつハ八洲文藻と
 款ナリハ款アツマハ教書ナリカハ神祇と云ハ討肉の
 神官を奨励シテ神道を再興シ徳社ヲ神田と寄附シ
 民小論テ糸紀を懐シむる類カハやく和存ヲ誅と論シ
 且教神の多業ナクテ一々其の善と純述シテ
 一何ラモ款ナリハ乞ひテ其の善と純述シテ
 あり而るも操夫の善もトクテ其の善と純述シテ
 帰化シテ神臣ナリテ肅然を征シ寛仁弘安ハ海寇を却ケ
 一ハ其の善と純述シテ其の善と純述シテ
 和安の流と海外小述ハ東照宮と云ハ其の善と純述シテ

を設邪流を刑戮シ大猷公の位時と云ハ其の善と純述シテ
 皆人の知る所ナリ然ラズハ外夷の跡ハ身法大子ナリテ
 神海を浸侮シ景山光公之見の明ナリテ其の善と純述シテ
 深く憂慮シ崇徳の才を海寇セラレ討と襲撃シテ其の善と純述シテ
 備と修修シテ旅と神孫シテ大流と清造シテ其の善と純述シテ
 其の善と純述シテ其の善と純述シテ其の善と純述シテ
 大城ハ其の善と純述シテ其の善と純述シテ其の善と純述シテ
 世ハ其の善と純述シテ其の善と純述シテ其の善と純述シテ
 造ありハ款攘夷の善ありハ其の善と純述シテ其の善と純述シテ
 其の善と純述シテ其の善と純述シテ其の善と純述シテ其の善と純述シテ

一 終に邪を拒くを以て講究し破邪集の書と刊行
 せしめり序文に方今蠻夷來逼日甚一日外奮武衛
 内息邪説是吾急務之海内争講解行之書安知異
 日不為邪説之媒と親書し終に又文臣亦命て息拒
 編と景修せしめ邪を拒く料とあり終に邪を拒くを
 了法國を併吞しんは黠虜の本謀あり是を拒くは法
 よと云て謀のつるはれは實に攘夷の急務と云ふ也一 吾乃
 やく焉 又も攘夷の急務と云ふの事業あり道徳を
 説く膠柱の論を以て自ら是とせんとするものは
 同日の論ありと云ふは攘夷の志ありんものら面し乃

時處位を審思慮して身之私を省き其力の成り得ん
 きとて交るふ行い辭率ふして後害を絶つべし

神聖同佛

神聖の道之倫を明しはるまきて此の大道なり神聖
 と佛とをいへりて尊卑を令せたうや一 大古より人倫の明き
 一 八曾て余の持倫はるやく天臣の家父子乃親て地の初
 子 天神の詔勅ありて倫既に明かり夫婦のあり 伊其諾
 言 伊其冊言の語も若し世初の為り 之貴子乃は何も本はさ
 勿友の信は天神の協恭和衷なり同く 天神の事へま
 一 ふう見つる されは竟る舜咄倫のまも信令せて弘道破

神智を合一しては成るる又空なるは然るふ
 近世皇國學稱するものその皇統印へ志す皇國學
 道たるを論せしや皇朝見たり人備天慈の大
 道たるを言 天神の時より人備やく切なること悟ら
 して 神智と道相交せりやく強て造言し務く
 聖人と濼濼して自己の妄説を法し 神智の因
 帰たる天地の自然され東西彼此の隔るなく 應神
 の朝に聖人乃書と得るも 愚物なるを 法ひ 考証
 天智の時漢唐の制と斟酌して禮制を立給ひて是
 ともふるやう 累代を行きしや違ひ給ふは然る

こと極て聖人を學ぶは 愚物の智と詩記
 なるより人備と茂ゆるは上古の神と茂ゆるを
 るや皇國學の統も國統を論して皇朝見しありさ
 ら思ひしやわるるも皇朝の憐しきやわれしや心
 の思ひしや然の大道を悟りしは確なる皇國學
 して神智回復の大道のたしむる也

閑聖漫錄終

書閑聖漫錄後

我會澤先生著書殆充棟而其
 既上梓行於世者亦不下數種晚
 有閑醒漫錄之述一日先生出亦未
 曰此為晚偷世俗而作者亦有可
 取乎既而書實北澤生欲得先生

之著書刻之未謀於身之曰善
哉乃請先生之之年老且疾猶飛
勉授讐克成而授之實其沒之
前月六日如居數月生又來請曰
先生著書雖夥矣此編至之死
不廢刻潤者而某親得之於先生

可謂幸甚今剞劂將竟功而先生
不可見也君蓋志吾身未余謂先
生之著書既行於天下古身傳誦
則新書之行亦固不待多之歎也
抑先生夙抱有為之志學問正大刻
苦絕人其平生雖迭遭困厄之際而

志益銳著心益勤善八十已得
年猶一日也所述大率明大道而
塞邪經原倫理而正人心吾言
博莫非為天下國家者如新
書之其一端也讀者不以其語言
平易必能察其用意而在觸類長

之則不唯學者可以前悉祛疑而
當路任政者亦將有所取益於此
吾乃不辭以固陋遂次其言以
與之俾附于卷尾焉

文久三年夏冬日

門人石河幹隋拜識

志道鏡若心門入氏前新鑑
及人送年中燈陰及月米則大道而
德心不離心國何家大後及不
相繼出改法心者有下便於津地
平陽心通於心心心德心流流也

會澤恒蔵著

文久三癸亥年仲冬

京都寺町通松原下ル
勝村治右衛門
大塚心齋橋安堂寺町
秋田屋太右衛門
江戸日本橋通二丁目
山城屋佐兵衛
江戸日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛
江戸淺草茅町二丁目
須原屋伊八
水戸下町本三丁目
須原屋安治郎

